

《シンポジウム》

司会コーディネータ 樋笠勝士

企画の趣旨

ストア派の言説は、事柄自体としてはキリスト教のそれに極めて親和的であり、単純に比較したときには同一内容であると考えてしまうのは自然なことである。従って、中世キリスト教思想に対するストア派思想の影響というテーマは、テーマとしては思想史研究として課題性が強く要請されるものの、研究の実質としては思想的差異の指標を得ることが極めて困難であると言わざるをえない。それにもかかわらず、かかる課題に対しては、中世思想研究の立場では、たとえ試験的であるとしても挑戦的に立ち向かうべきであるし、直接的影響関係を証明できなくとも、「ストア派的言説」として思想の通奏低音的意義を見いだすことは、極めて建設的なことであると言わねばならない。幸い、先駆けとなる G. Verbeke や R. Sorabji などの研究もあり、教父思想や中世思想へのストア派的言説の伝播については一定の見通しを描ける素地もある。このような開拓的歴史研究がシンポジウム企画の第一の趣旨である。この故に、シンポジウム企画チーム（小川量子、松根伸治、樋笠勝士）は2年連続企画を提案し、2009年度は東西教父思想及びスコラ哲学前夜という課題、2010年度はトマス哲学とその周辺という課題（序説：松根伸治、提題：桑原直己、加藤和哉、藤本温、シンポジウム運動特別報告：小川量子）を担うこととなった。第二の趣旨としては、シンポジウムのあり方に関わるものであるが、課題設定型の提題とした点である。企画チームは、各提題者に対して個々の研究課題を与えた。提題者はそれに応えるべく新たな研究を1年前から開始し、テーマや問題意識を相互に共有しつつ一種の共同研究の形態をとり、大会にて各自の成果を発表した。結果として各提題内容が有機的に連関し、質疑もかみ合うものとなった。質疑の形式についても、2010年度は特定質問者（山本芳久）が上記の共同研究に関わることで、諸々の問題提起を、提題と同様に1年前から準備することができた。加えて、昨年以來試みてきた

質問票による代表質問の形式と従来の自由な質疑の形式の併存も採用した。

さて、今回の課題は、本来は、スコラ期哲学におけるストア派倫理学の影響或いはストア派的言説の伝播であるが、研究内容を絞るために三提題はトマス哲学研究に限定した。従って、すべて提題は「トマス哲学におけるストア派倫理学」となったが、提題者各自の視点の違いにより、研究者たちがそれぞれの課題に取り組むこととなった。これに関連して特別報告はトマス哲学を相対化するためにトマス以外を扱うことにし、今回はストア派倫理学で中心的な主意主義をテーマとすることになった。

2010年度シンポジウム及び特別報告について

本シンポジウム企画は昨年に引き続き「序説」の場を設定した。昨年は企画の趣旨に沿って「ストア派倫理学」を説明する序説（故中川純男担当）を行ったが、今回はトマス倫理学とストア派倫理学の接点に関する視点の可能性と研究方法等に関するものとなった。担当した松根伸治はVerbekeの研究を通じて、二つの倫理学の関係への「登山口」として、例えば、理性と情念の関係、徳倫理学等の諸視点を示すことで研究の配置図を示しながら、同時に、アウグスティヌス的でもアリストテレス的でもない第三のキケロ的な政治的自然主義の思想潮流に注目する新しい視点も提案している。続いて、最初の提題として加藤が「ストア派 Stoici」の用語の使用法について『神学大全』を中心に研究報告した。Stoiciの語が実際の歴史的ストア派を指すか否かについては措くとして、トマスがその名前でどのようなことを理解し、自らの思想に関与させてきたかについて多くのことが明らかにされた。この語がトマスの倫理的考察の場に集中的に登場するのは注目すべきであるが、そこにおいて「情念を退ける」と「有徳者に情念がない」というストア派倫理学の中心的視点が取り出される。これは、トマスがアウグスティヌスに依拠しているからであるが、これを以て、かかる視点を中世思想全体が共有する視点となったのではないかと加藤は指摘する。これは、トマスの情念論だけでなく、『ニコマコス倫理学註解』においてアリストテレス倫理学をStoiciの倫理学と対立させ後者を批判する議論でも同様であり、倫理学上の「論敵」としてのStoiciの位置づけが明確になったと言えよう。次の第二の提題として藤本が「自然法」概念について二つの倫理学を比較する報告を行った。それは自然法における「内的」と「外的」の区別をストア派からトマスまで連続的に見る研究である。ストア派では外的神的理性と内的自発的理性とは賢

者において一致するものの、その区別もまたストア派の原理的問題として浮上していたと見て、藤本は、トマスがその自然法の区別を更に展開させる仕方で、前者を神・原理・規則として、後者を能力・習態・徳として、自然法を両義的に扱っていると論じる。特に、倫理学上主題となる後者について、トマスは、*συντήλησις* の問題として、これを「良知」や「自己保存」の視点から論じていたことが明らかにされた。更には、トマスが、「誘発」を通じて、内的な自然と神の法との連続を見ていたことで、ストア派の原理主義的側面が垣間見える一方で、ストア派を批判しつつ、賢者以外にも開かれた自然法的理性としての *synderesis* と、賢者を賢者たらしめる「賢慮」とを区別することで、ストア派の自然法の受容と変容が理解されてくる。さて、最後の提題は、諸徳の合一についての桑原の報告である。*prudentia* による徳の合一は自然本性の完成であり、このことはストア派の *κατορθώματα* と一致するものではあるが、トマスによれば、そこには限界があり、それを超越するものとして、*prudentia* を含む無条件的な意味での徳の実現として、*caritas* による徳の合一が示される。ストア派は自然本性と神的本性との一致を考えるが、トマスは自然本性を超える神的本性を考え、そこに断絶を見るという両思想の相違が文献学的に客観的に比較されることで、両倫理学の不連続が明解にされた。ここでは、トマスは、言わばストア派批判を方法的に採ることで、「神愛」と「賢慮」と「倫理的徳」との結合を倫理学として打ち立てたとする視点が注目に値するであろう。

これらの三提題に対して特定質問者として、山本が、先ず加藤に対しては言葉の問題乃至 *auctoritas* の点を、次に藤本に対しては、時間の中での自然法に関連してアダムの救済史的境位や、「内的」「外的」のストア派的区別の導入によるトマス哲学の変容について、そして桑原に対しては、徳の合一に関して、ストア派における徳の一性とトマスにおける徳の複数性の問題や、アダムを自然本性だけで考えることの問題等について、問題提起した。また質問票では、ストア派倫理学で政治学的側面を考える可能性、アダムのもつ徳性について、人間の自然本性自体に潜む自己超越性の可能性、アパテイアに関連して広く *passio* や *impassibilitas* の問題、ストア派の論敵としての役割と限界、神の法と自然法の関係等の質問があったことを記しておく。

トマス哲学の周辺の課題として小川はシンポジウム連動特別報告「主義とストア主義」の報告をシンポジウムに先立って行った。これはヘン

リクスとスコトゥスを通じて、中世思想における独自の主意主義を13世紀後半の史的展開の中で明らかにしたものである。ストア派的な自己運動の概念を淵源としつつ、かかる主意主義の概念は本性的な完成に向けられた一義的運動として形成されることになる。その形成過程で、ヘンリクスは、自己犠牲の論点では、キケロを通じて、自己の理性的選択における善の理解こそが意志へと進みゆく道をつくるとするのであるが、他方でスコトゥスは、更に進めて、意志を理性的な能動原理として捉え直していたのである。両者の理性と意志の関係性には違いがあるが、それでも、ストア派の主意主義に媒介された思想の変容として、近代における理性と自由の一致につながる先取的議論となっていることが明らかにされた。

スコラ哲学の時代にストア派を知るためには、間接的な資料を相手にするほかないであろう。その中心は、一方ではキケロやセネカの伝承であり、他方ではアウグスティヌスなどの教父の権威である。これらの言説は、もちろん、初期の厳格なストア派と同時にローマ化されたストア派をも伝えており、既にストア派の多様性が表現されていることになる。トマス及びスコラ期の哲学は、これらを一方では中世キリスト教倫理想の形成に利用し受容しつつ、他方で論敵としても扱うことでキリスト教倫理想を新たに塑形していったと言ってよいであろう。こうしてストア派的言説は西洋中世を生きながらえて近代思想へと自己展開させてゆくのである。

(本シンポジウム企画については、故中川純男先生から多くのご助言とご意見をいただきました。2年企画の成果は中川先生のおかげであると深く感謝しております。謹んで哀悼の意を表します。)
